

本会結成35年を迎え 記念事業の検討を開始



三矢町 浄念寺

宿場町枚方を考える会は昭和60年3月、三矢町の浄念寺において総会を開き、結成されました。以来、諸先輩の熱意と尽力により、会の継続・発展が図られてきました。

本年は結成から35年を迎える節目の年であり、令和2年度事業の一環として、記念式典および事業の実施に向けて検討を開始しました。

平成22年の結成25周年では、北大阪商工会議所において京都橋大学名誉教授の猪熊兼勝さんを講師に迎え、「枚方の百済王氏（望郷の王族たち）」と題した記念講演会を開催、187人の出席をいただいております。平成27年の結成30周年では、枚方市立メセナひらかた会館での記念式典や記念事業として6日間、「枚方の歴史入門講座」を開催、

こうした事例を参考に立案し、実施計画が決定すれば、順次、会員の皆さんにお知らせしますので、ご参加下さるようお願いいたします。



猪熊兼勝京都橋大学名誉教授

会員や一般市民など延492人の参加をいただきました。



第91号

発行

宿場町枚方を考える会
会長 上谷 勝己
枚方市船橋町2-87-7
072-857-2995

事務局

枚方市出口2丁目6-6
上野幸夫 072-832-5722

編集 広報委員会

主な内容

- 結成35周年事業の検討を開始（1頁）
- 東海道シンポジウム藤枝宿（2頁～6頁）
- バス見学会 奥河内を探訪（7頁～9頁）
- 枚方偉人伝 法明上人（10頁～11頁）
- 枚方の三古墳を考える（12頁～16頁）

第32回東海道シンポジウム（令和元年10月11日）

藤枝宿大会に参加

門真市 辻他 久雄

折しも、後に静岡県伊豆半島に上陸し、関東地方や甲信地方、東北地方などに記録的な大雨を降らし、甚大な被害をもたらすことになる台風19号が、日本列島に接近しようとしている時、私たちは静岡県藤枝市に向けて出発しようとしていました。

予定していた宿泊のホテルを前日にキャンセルし、開会式のみに参加を決めています。しかも、台風や新幹線の運行状況によっては、いつでも大阪に戻れるようにとの心づもりをしての参加でした。新幹線が京都駅を発車するころ、青空だった空が、名古屋に着くころには鉛色になり、浜名湖が見えるころになると、車窓には雨粒がかかるようになっていました。台風が我々の目指す方向に近づいて来ているのを否が応でも実感させる天気の変化でした。

到着した雨混じりの静岡駅のプラットホームは、大勢の人で溢れていました。それもやたら多くの外国人ばかりが目につきます。その理由が後ほど分かることになるのですが、静岡駅で東海道線の掛川駅方面行きの電車に乗り換え、藤枝に向かいました。黄色のユニフォームを着た、賑やかな外国人の一行も同じ車両に雪崩れ込んできます。

もうお分かりと思いますが、その集団はラグビーのオーストラリアチームのサポーター達なのです。掛川市のエコパスタジアムで行われるワールドカップの試合を応援するための人たちなのです。思わぬ所でグローバルな日本の姿に気付くことになりました。



さて、今回の「第32回東海道シンポジウム藤枝宿大会」の開会式は、藤枝駅から車で20分ほど離れた藤枝市生涯学習センターで行われました。

枚方宿からは、枚方文化観光協会から3人、そして観光ボ

ランティアガイドから1人の計4人での参加となりました。台風接近という悪天候の中、会場は東海道宿場町の代表者で埋め尽くされていました。



天候が時間とともに悪化していく中で、参加した時間が限られていましたので、全てをご報告することは叶わないのですが、私が印象に残った話を書かせていただきます。

基調講演 今川氏

基調講演は、ここ藤枝市との関係ということで、「今川義元と藤枝」という演題で、静岡大学名誉教授の本多隆成氏の講演がありました。以下はその内容の概略です。

今川氏は、室町幕府将軍の足利家の一門でした。暦応元年(1338年)、初代範国が駿河国守護に任ぜられ、駿河今川氏が誕生します。話は第七代氏親の時代に守護大名から戦国大名へと変貌していく過程から始まりました。それは、血で血を洗うといった、

自分の実力で解決を図る自立救済の中世から、近世的原理へと変換していく時代への転換期でもありました。

氏親は領国を拡大すると同時に、領国支配に新たな方式

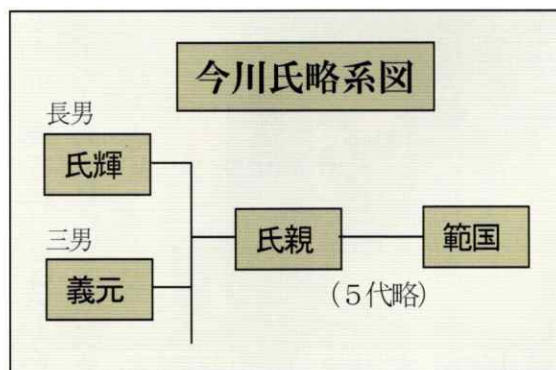
を採用していきます。永正15年(1518年)から検地を施行します。また、分国法の整備を行います。大永6年(1526年)に「今川仮名目録」

三十三カ条を制定します。その八条には、「喧嘩両成敗法」があり、後の信玄制定の天文16年(1547年)の「甲州法度之次第」などにも大きな影響を与えるものとなります。

このように氏親が行った検地や分国法制定によって、今川氏は守護大名から、領国において政治・経済・社会などの諸側面で最高・唯一の公権力者である戦国大名へと変貌していきます。

後を継いだ八代氏輝の死後、今川氏は家督を巡ってのお家騒動が起きます。それが、「花蔵の乱」天文5年(1536年)と呼ばれるものです。この舞台がまさに藤枝であり、

これに勝利した義元が今川氏の家督を相続し、九代を継承することとなります。



義元は、甲斐の武田氏の娘を嫁に迎えたことから勃発した「河東一乱」の後、天文年21年(1552年)〜54年(1555年)北条氏・武田氏と三國同盟を結びます。この後、永禄3年(1560年)の桶狭間の戦いで義元が信長に討ち取

られるまでの10年足らずの間が、今川氏の全盛期となります。



今川義元 歌川国芳画 (太平記部分)

義元の政策と領国支配としては、天文18年(1549年)3月の松平広忠の死去を契機に、西三河岡崎城を接収。三河全域が今川領内になり、義元は駿河・遠州・三河の三カ国を領有することになります。天文22年(1553年)には「仮名目録追加」二十一条を制定し、併せて「訴訟条

目」十三カ条も制定します。また、家臣団の編成の強化の一環として、寄親・寄子制による軍役衆の組織化を行っています。その他、流通経済の発達を受け、御用商人による統制を図ることも行っています。加えて交通・運輸体制の整備として、伝馬制度を創設しています。

今川氏は七代氏親の時代から、京都の公家衆とのかわりを深めていきます。氏親の母北川殿は伊勢盛定の娘で弟は盛時(北条早雲、姉北川殿は正親町三条実望の妻、妻寿桂尼は中御門宣胤の娘です。関係者のかかりのものが駿府に下向していたことが想像できます。

また、今川氏の軍師として政治・軍事・外交に手腕を発揮し、義元を支えた太原崇孚雪斎は、氏親が京都の建仁寺

から招いた僧であり、義元の子教育係を命じられています。雪斎は、後に人質として駿府の臨濟寺に預けられた幼少期の竹千代(のちの徳川家康)の教育係としても活躍します。

このように今川氏は、京都の文化を伝える僧だけでなく、歌人として名高い冷泉為和や京都の連歌師などとも交遊を広げていきます。為和は義元邸の歌会にたびたび出座したりしたことが記録からもわかります。これらの影響もあり、駿府では「今川文化」ともいえる文化が開花していました。

私たちに、義元といえは、桶狭間で信長の勇壮な戦いぶりをイメージするとともにかたや一方の無能で無残な敗者としての武将としての印象が強いのではないのでしょうか。しかし、本多先生の講演を聞いていて、公家風のイメージ

が強い今川氏ですが、実は他の大名がお手本とするほど先進的な領国経営をしていたことが見えてきました。

歴史は、戦の勝者や後世の人の手によって、その時代にふさわしいように、また都合のいいように創られるものですが、義元もその例かもしれませんが。残された資料や古文書から改めて見つめ直す必要が大切だということがよくわかります。

藤枝宿

さて、「藤枝宿」について少し触れておきたいと思えます。実は2日目に藤枝宿の散策を予定していたのですが、台風接近というアクシデントに見舞われたので、残念ながら藤枝宿を見て歩くことは叶いませんでした。ここからは藤枝

宿について少し調べてみたことを書いてみますので、ご了承ください。

藤枝宿は東海道22番目の宿です。江戸からは49里30町44間(約200km)、東隣の岡部宿へは1里26町(約7km)、西隣の島田宿へは2里8町(約9km)のところにあります。



近くを流れる瀬戸川は、乾期には仮橋が架けられ、通常の水量の時は歩行渡しを利用しました。藤枝宿は、歴代の城主が江戸幕府の要職を務めた田中城を仰ぐ本多家四万石

の田中藩の城下町でもあり、また塩の産地であった田沼意次の所領相良に通じる田沼街道や、高根白山神社への参道高根街道・瀬戸谷街道などの交通の要衝として、また商業地しても栄えました。

藤枝宿は、他の宿場のように、一つの町や村が宿場になつたものではありません。志太郡、益津郡の街道沿いの八つの村の街道に面した一部の町が、それぞれの親村に属しながら宿駅の役割を担つたものです。

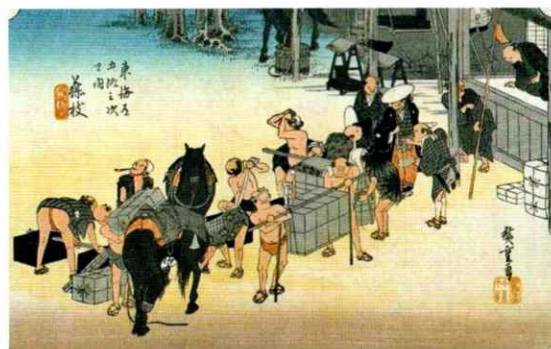
その中心が上伝馬町・下伝馬町で、上伝馬町では下りを、下伝馬町では上りの伝馬業務を分担していました。そして、業務を助ける町として、上伝馬町には川原町・木町・鍛冶町・吹屋町の四力町が、下伝馬町には長楽寺町・左車町の二カ所がおかれ、これら六カ

町を平町と呼んでいました。

六カ町と同じように街道筋にありながら、伝馬などの諸役を免除されていた町があります。長楽寺町と下伝馬町との間にある白子町で、この町は、天正10年(1582年)の本能寺の変の際、駿河へ逃げる途中の徳川家康を助けた伊勢白子(のちにロシアに漂着して有名になつた大黒屋光太夫の出身地)の小川孫三がその恩功から当地に住むことを許され、新白子と名付け、

地子・諸役御免の朱印状を賜つたことに由来しています。問屋場が常備する百人・百疋の人馬は、人足11人ずつと馬50疋ずつは両伝馬町で負担し、残り78人の人足は六カ所の平町が負担していました。そして、両問屋場には、問屋場の総責任者・問屋、年寄、帳付、馬指、人足指などの役

人が毎日詰めており、伝馬業務に当たっていたのです。



東海道53次 藤枝 歌川広重 人馬継立図

前に述べた「白子」の話ですが、開会セレモニーの折、藤枝宿の民俗芸能披露ということで、舞台で津軽三味線のこと、舞台で津軽三味線の弾き語りがありました。本能寺の変により、信長亡き後、堺から命からがら三河へと逃避する徳川家康の話で有名な「神君伊賀越え」を、三味線

を弾きながら語るといふ熱演
でした。



その中で伊勢「白子」から
小船での脱出劇があります。

その時の縁が元で、藤枝に「白
子町」が生まれたと伝わって
います。実際に藤枝の町を歩
いてみると、「小川眼科」前に
「白子由来記の碑」と絵タイ
ルが造られています。

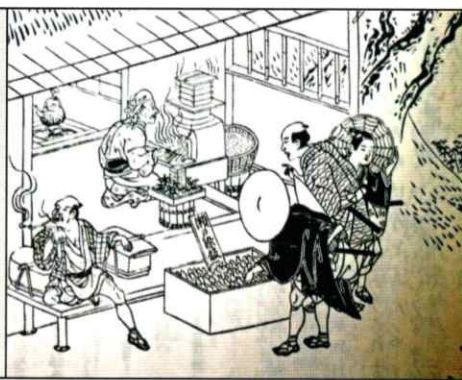
最後に、触れておきたいの
が、藤枝の街道名物である「瀬
戸の染飯（そめい）」です。
会場のロビーに入った時、見
慣れない黄色い色をした食べ
物が売られていました。それ
が染飯でした。強飯（こわめ

し「おこわ）をクチナシの実
で黄色く染め、せいろで蒸し、
すりつぶして小判形に薄く伸
ばして乾かしたものです。

クチナシは漢方薬として知
られ、消炎、解熱、鎮痛など
の薬効があるとされています。
また、疲労回復にも効くとい
われており、旅人の携帯食と
して重宝されていたようです。
ここ藤枝宿は、西には大井川、
東には宇津ノ谷峠の難所を控
えていたことから、そのこ
とが想像されます。

瀬戸の染飯は、藤枝宿の西、
瀬戸町（現在の藤枝市瀬戸、
上青島付近）の立場（旅人の
休憩場所）の茶店の名物でし
た。戦国時代・天文22年（1
553年）の「参詣道中日記」
に「せとのそめい」という
記録があるほど古い歴史があ
るようです。また、染飯は十
返舎一九の「東海道中膝栗毛」

に登場したり、小林一茶も俳
句を詠んでいるほどで、街道
の名物であったことがわかり
ます。その他、寛永9年（1
797年）に刊行された「東
海道名所圖會の巻四」には、
茶屋の中にかまどの火を起こ
し、せいろで染飯を蒸す老婆
と店先で染飯の品定めをする
旅人の情景が描かれています。



東海道名所圖會巻四
名産 瀬戸染飯 (部分)

実際どのような味がするもの
かと興味を持って眺めていた
ところ、偶然にも会場内で、
以前に街道歩きで、枚方の鍵
屋資料館を訪れたことがある
方に出会い、この名物の染飯
をお裾分けしていただくこと
になりました。

家に持ち帰り食べましたが、
クチナシの香りがかすかに口
の中に残り、独特のもちもち
とした食感と甘みがあつて美
味しかったです。

さて、楽しみにしていた2
日目の宿場歩きはできません
でしたが、機会があれば是非
とも、藤枝宿を実際に歩いて
確認したいものです。

藤枝からの帰りは、新幹線
が計画運休される影響で、自
由席の通路まで人が溢れ、京
都駅に着いた頃には、くたく
たでしたが、なんとも記憶に
残る研修旅行となりました。

バス見学会 奥河内の遺産を探訪

八幡市 榊原啓雄

本年度のバス見学会は令和元年11月20日、大阪府南河内の狭山と河内長野でした。近くを選んだ理由は、乗車時間を短くして、見学時間を多くしたいからです。

河内長野市の観光ガイドブックでは、南河内という名称は使わず、「奥河内」と記述されています。これは、河内長野市を中心とした大阪府南東部を、自然豊かなエリアとして、観光プロモーション用に使われ始めた表現だそうです。この「奥河内」の河内長野市は、大阪の都心から電車なら40分程度で、観光協会のパンフレットには「中世に出逢えるまち 1千年にわたり護られてきた中世遺産の宝庫」とあり、その中心が檜尾山観心寺と天野山金剛寺の二大寺院です。

観心寺は、すでに当会も平

成24年に訪問していますが、金剛寺は今回が初めてです。見学後、参加者から「金剛寺よかったですね」との嬉しい声をお寄せいただきました。

行先選定の裏話

実は、見学先の検討時には、金剛寺はまったく候補に挙がっていませんでした。バス見学会の研修担当者としては、「本会の名称に関連する街道・宿場に関する場所を…」という強い思いがありました。ちょうど河内長野市には高野山に向かう信仰の道である「高野街道」が通っており、平安時代以降、京都から奈良盆地を経て、高野山に至る「大和路」が高野山参詣の道筋として使われていました。その後、長承元年（1132年）

鳥羽上皇によって始めて、天

王寺から高野山に向かうという、いわゆる「河内路」が使われるようになりました。さらに時代を経た江戸時代になると、幕府は交通網の整備を行い、河内長野市には、「三日市宿」が設置されました。

当時使われていた参詣ルートとして、東高野・西高野・中高野・下高野があり、これら四つの高野街道が河内長野で合流し、一本の高野街道になっていました。この高野街道の重要な三日市宿沿いには、長野神社・烏帽子形八幡神社・天野酒造はじめ、古民家なども多くあり、昔の風情が多く残っている街道です。

また、下見の際にいろいろ相談にのっていただいた河内長野市観光協会の方からも「三日市宿場町の散策、とても人気がありますよ」と強く推薦されていたこともあり、

「高野街道三日市宿場町散策コース」を選択して、本格的な下見活動に入りました。

ところが二度目の下見の際河内長野市観光協会に出向いて、実施当日のガイドの予約とバス駐車場の確認をしたところ、担当者から「最近交通規制が厳しくなり、駅前や街道近くに大型バスは止められない。市観光課指定の駐車場は、見学先からは相当離れた場所にあるが、我慢してほしい」との厳しいお話。小グループなら駅前での乗降は可能だが、大型バスでは、駐車違反になるとのこと。このような状況では「街道宿場町コース」を断念せざるを得ませんでした。そこで再度、観光協会の方に「どこか良い見学先はないですか？」と尋ねたところ、金剛寺を紹介していただきました。宿場町は見学できなく

なりましたが、「中世に出逢えるまち」千年にわたり護られてきた中世文化遺産の宝庫」といわれる奥河内を訪ねることができました。結果オーライということで、担当者としてもホットしたところです。以下、見学先の概略を紹介します。

狭山池博物館

日本最古のダム式ため池をメインに、土木と治水の歴史がわかる博物館です。



狭山池博物館

七世紀の初めに誕生した狭山池の改修は、奈良時代の行基、鎌倉試合の重源、江戸時代の片桐且元など、歴史上有名な人物が携わってきました。



重源坐像

千四百年の歴史が重なる堤水を取り出す樋堤の滑りを防ぐ木製杵工など、土木遺産を未来に継承し、「治水」「灌漑」と土地開発の歴史を、現地から移築した土木遺跡を中心に、ガイドさんから丁寧な説明を受けました。ガイドさんは、もっと時間がほしいとのことでしたが、残念ながらスケ

ジュールの関係から途中で切らせていただきました。



樋の遺構



堤(断面)の遺構

この博物館は府立博物館ですが、入場料もガイド料も無料という、見学者には大変あ



多宝塔 (重文)

この寺は奈良時代、聖武天皇の命を受けた行基上人(菩薩)が創建しました。平安時代末期から中世にかけては、巨大な境内都市として発展した密教寺院で、空海も修行した聖地となっています。歴史が濃く、深いため、多くの文化財を残しています。

天野山金剛寺

りがたい博物館です。都合のつく方は再度訪問されたいかがでしょうか。

後白河天皇の妹、八条女院が帰依し、女性の参拝を受け入れた金剛寺は「女人高野」とも呼ばれ、南北朝時代には南朝の重要な拠点として約6年にわたり後村上天皇の行宮でした。現在は、真言宗御室派大本山となっています。

大阪府立花の文化園

河内長野市にある大阪府立の植物園です。ここでは、花に関する様々な文化を楽しむことができます。

1990年に大阪市鶴見緑地で開催された「国際花と緑の博覧会」の理念である「花と人との関わり合いを理解する場所」として、同年に設置されました。「花に憩う」「花に学ぶ」「花で交流する」の三つを開園の基本方針としています。



参加者で記念撮影 (金剛寺楼門前)

枚方ゆかりの偉人伝

法 明 上 人

小倉東町 平良一郎

法明上人（ほうめいようしよ
うにん）は融通念仏宗（ゆう
ずうねんぶつしゅう）の中興
の祖と呼ばれています。

大念仏寺（たいねんぶつじ）
を総本山とする融通念仏宗は、
良忍上人が1117年（永久
5年）に開宗しました。しか
し、第六世良鎮が没した後に
一度途絶えます。その後、復
興に努めたのが第七世の法明
上人です。

法明上人は、弘安2年（1
279年）10月10日、摂津
国東成郡深江村（現大阪市東
成区深江南）で生まれ、幼名
を信貴千代と称しました。父
は後宇多天皇（第91代）に仕
えた清原右京亮守道（従五位
下）、母は河内枚岡神社の神官
の娘です。

父、母、子、妻と相次いで
肉親の死に遇い、世の無情を
感じて25歳の時に高野山に

登り、千手院谷真福院の俊賢
法師の許で出家し、法明坊良
尊と号しました。法明上人は
初め密教を修学しましたが、
のち念仏宗に帰依し、高野聖
として活躍していました。

元亨元年（1321年）11
月15日、上人が43歳の時に
「石清水八幡宮に納めてある
融通念仏宗の霊宝を授かり、
法灯を継承して後継者になる
ように」との夢のお告げがあ
りました。当時、融通念仏宗
は良い後継者に恵まれず、1
00年以上、中断してしまし
た。

上人は早速深江の庵室（現
大阪市東成区深江南の法明
寺）から、弟子12人を連れて、
石清水八幡神のある男山に向
かいました。途中、東高野街
道で、同じように夢告げを受
け、霊宝を奉じて深江に届け
ようとする石清水八幡宮の使

者小川伊高の一行に出会いま
した。この出会いの場所が河
内国交野郡茄子作村（現枚方
市茄子作南町）だったので。



出会い場所（本尊掛松遺跡）

小川伊高は直ちに上人へ
「十一尊天得如来（じゅう
いつそんでんとくによらい）」
画像を伝授しました。



十一尊天得如来

「あな嬉しや」
上人は歓喜のあまり、本尊

画像の掛け軸を傍らの松の枝に架け、称名念仏を唱えて松の周りを踊りだしました。これが融通念仏宗の念仏踊りの起源とされています。

この松は「本尊掛松」と呼ばれて、この名はこの本尊画像を掛けたことに由来し、「ほととぎす松」ともいわれるのは、ほととぎすの鳴き声が「ホンゾンカケタカ」と聞こえることによりです。「本尊掛松」の跡地は、閑静な住宅地の中にあり、融通念仏宗にとって聖地となり、大切に守られてきました。



本尊掛松地蔵尊
向って光背の左側に法明上人御舊(旧)跡と刻まれています。

松の木は明治30年代に枯死してしまつたようです。現在は新しい松が植えられています。

このあと上人一行が一夜の宿を借りたのが、この近くの犬井甚兵衛(いぬいじんべい)屋敷(枚方市茄子作北町)でした。



犬井甚兵衛屋敷跡

その後、法明上人は、融通念仏宗第七世の法灯を継承し、河内を中心に摂津、大和、紀伊に信者を拡げて宗派の再興に努めました。法明上人は1349年(正平4年・貞和5年)6月13日、法明寺にて71歳で入寂し、その墓は、摂津国渋川郡有馬村(現東大阪市長瀬2丁目の長瀬霊苑)と高野山にあります。また小川伊高は融通念仏宗に帰依して、その子孫は永く摂津国住吉郡平野村に居住し、法灯の外護



大念仏寺本堂



大念仏寺山門

者となったと伝わっています。現在、融通念仏宗の総本山は大阪市平野区平野上町の大念仏寺です。

禁野車塚、万年寺山、牧野車塚

三古墳を考える

交野市 堀家啓男

縄文 弥生の枚方

弥生は戦いの時代

縄文人は穂谷など、生駒山系の山麓などにわずかな生活の痕跡を残しています。水辺を取り巻くように暮らし、縄文晩期には穂谷川左岸の交北城ノ山遺跡(複合遺跡)に土器や石製品を残しました。枚方丘陵下の天野川低地、岡東遺跡でも深鉢などが出土して

います。

弥生時代は稲作が進みますが、水や土地をめぐる激しい戦いが起こり、環濠集落が生まれます。弥生の人々が枚方で集落をつくるのは「魏志倭人伝」に記述される倭の各地に「国」が誕生する弥生中期(紀元前400年〜同50年)以降のことです。人々は淀川低地から川伝いに枚方近辺へ入植を始めます。

天野川下流では星丘西遺跡

が、穂谷川水系では交北城ノ山遺跡や招提中町遺跡ができます。いずれも谷底平野を臨む台地上で、防御に適した崖上です。水量のある天野川水系は大和盆地へ抜けられ、通行も有効でしたので、下流の枚方から上流の交野にかけて開発されました。水稻耕作による社会変化は、人々の間に身分差を生じさせました。穂谷川左岸沿いの城ノ山遺跡などでは、住民に階層のあるこ

とを示す方形周溝墓が多数見つかっています。中期も後半、戦いが激化すると、城ノ山遺跡や招提中町遺跡は廃絶、より防御に適した高台の田口山遺跡に移転します。一方、天野川水系では星丘西遺跡が当地で大集落に発展します。見つけた方形周溝墓の一つからは頭に髪飾りをつけたシャーマンと思われる人物を刻んだ土器が見つかっています。

天野川水系の優位性と首長墓

弥生後期(紀元前50年から紀元後180年)は、各地の政治ブロック間をめぐる戦いとなります。枚方近辺で弥生集落は急増しますが、穂谷川水系では、集落は周辺に分散します。各集落は丘陵上や段丘崖上に限りましたが、村を守るためのV字溝を掘った

ものもありました。天野川左岸の藤田山遺跡では27 m以上のV字溝が見つかり、田口山遺跡でもV字溝が見つっています。「魏志倭人伝」では後漢の「桓帝と霊帝の間（紀元後147年〜同189年）、倭国大いに乱れ、更々相攻伐」とされ、各地の政治ブロック間における大動乱の時代であったとしています。枚方近辺もこの大乱に巻き込まれていたのです。

戦いに勝ち、巨大環濠集落として力を得たリーダーは、集落を出て濠や柵で囲む首長館を構え、独立した防衛施設を備えます。枚方近辺でも首長層が生まれ、特に天野川水系では大規模な集落や首長が生まれ、首長墓が築かれ、古墳時代に至る祖型となります。弥生終末期（紀元後180年から同240年）は弥生の

戦いの時代に終止符が打たれた時代です。鉄の供給ルートを北部九州ブロックから奪い覇権争いに勝利したのが畿内、大和の政治勢力でした。圧倒的な勢力をもった大和中心の政治的バランスのなかで、各地の政治ブロックが、お互いを承認しあう独特の共調体制となり、その結果、邪馬台国の卑弥呼が倭国王として共立されます。卑弥呼は弥生終末期に活躍し、紀元後239年には「魏」に使者を送り、「親魏倭王」の金印紫綬を授与されます。

墳丘墓から古墳時代へ

天野川水系に大規模弥生墳丘墓

弥生の墓制では、中期以降はリーダーの墓地が共同墓地から離れ独立し、終末期には

首長は丘陵の高みに独立した墓を築きます。枚方の中宮ドーンパ遺跡には、天野川が淀川に流れ込む低地に臨む交野台地西端に築かれた大規模な弥生墳丘墓があります。天野川水系を掌握した集団の首長墓と考えられます。

各地を見ると、有名な吉備の楯築（たてつき）墳丘墓は終末期のもので、円丘に方形の祭壇のような突き出しを持っていました。また出雲など日本海側では、四隅突出墓と呼ぶ陸橋のような突出部を持つ墳丘墓が築かれます。弥生終末期に各地の墳丘墓の形成過程で円丘に陸橋を残したような前方後円墳の原形に近い墳丘墓が生まれます。

前方後円墳体制の成立

3世紀半ば以降、畿内、大和の勢力増大とともに大和発

祥の前方後円墳の原形が各地に及び、各地独自の墳丘墓に替えて、同時発生的に、画一的な前方後円墳を造営するようになります。ネットワーク的な広がりの前方後円墳の造営という前方後円墳体制の成立をもって古墳時代の幕開けとし、前期は3世紀半ばから4世紀末とされます。

箸墓古墳の造営

大和では特に巨大な前方後円墳が誕生します。なかでも箸墓古墳（奈良県桜井市、全長280m）は、前方部が三味線のバチ型で、周辺から出土した特殊器台の示す年代から見て、3世紀前半ともいう前方後円墳出現期の最大の古墳です。その規模や被葬者の伝承から卑弥呼の墓ともいわれますが、卑弥呼の墓は「径百余歩」とされ、魏の尺度で

はおおよそ直径145mとなる
そう、長さが一致しません。
しかし、纏向遺跡の近くにあ
り、卑弥呼の世代に近い被葬
者の墓とみなされています。
バチ型の前方後円墳は、古墳
時代前期でも早い時代の特徴
です。

4世紀前半 ヤマト政権成立

古墳出現期以降、卑弥呼と
ともに国を治めたとされる男
弟(だんてい)、すなわちシャ
マンである卑弥呼の力を借り
ながら実際の政治権力を行使
した男性が、やがて世襲化し
主権者として巨大古墳を造営
します。考古学的に初代天皇
とされる崇神天皇(はつくに
しらすメラミコト)の陵墓
と比定される行燈山古墳の造
営が4世紀前半とされますの
で、前方後円墳体制の成立か
らほぼ半世紀を経てヤマト政

権が成立したのです。全国に
大小15万基の古墳がありま
すが、前方後円墳は約三千基
ということ。前方後円墳
体制は、最盛期の古墳時代中
期(5世紀)を経て6世紀末
(古墳時代後期は6世紀初頭
から6世紀末)まで続きます。

禁野車塚古墳

箸墓の相似墳と判明

枚方で最も早い古墳は、前
方後円墳の国史跡禁野車塚
(古墳/宮之阪5丁目)です。
京阪電車交野線宮之阪駅近く
線路側に後円部、天野川側に
前方部をおきます。最近の調
査では築造時、全長約120
mあり、前方部がバチ型と
いった特徴から箸墓古墳の相
似形とされます。古墳時代前
期、4世紀初頭の造営とみら
れ、天野川下流の水系を支配

し、初期ヤマト政権の影響下
に入った地方首長が被葬者で
あると考えられます。



禁野車塚古墳後円部

天野川上流、交野市内の森
古墳群にもバチ型の前方後円
墳があります。つまり上流と
下流で沿岸を支配圏とする首
長が複数あり、それぞれがヤ
マト政権の影響下でバチ形の
古墳を築いたのです。
箸墓古墳の相似墳は20基
ほどが西日本各地で確認され

ています。なかでも三角縁神
獸鏡が33面も出土した京都
府木津川市の椿井大塚山古墳
が有名です。同古墳の築造は
3世紀後半とされます。未発
掘の禁野車塚でも、将来この
時期に多い高野槇製の割竹型
木棺や多数の三角縁神獸鏡が
発掘される可能性があります。

万年寺古墳

三角縁神獸鏡等 8面が出土

古墳時代前期、4世紀初頭
に築かれたのが万年寺山(古
墳)です。枚方丘陵の突端、
現在の意賀美神社(枚方上之
町)の境内、社務所の付近、
廃寺となった万年寺跡におい
て、明治37年(1904年)、
旧枚方小学校の運動場造成工
事の際、鏡、木棺の破片など
が取り出されました。

魏から舶載の三角縁神獸鏡など8面発掘され、高野槲製の割竹形木棺が粘土郭で取り巻かれていた可能性などから、



意賀美神社社務所



意賀美神社本殿

前期ではあるものの、禁野車塚よりやや新しいとのこと。豪華な副葬品から見て、ヤマト政権の影響下にある地方の首長墓とみなされます。また隣接地で見つかった従属墓の箱型石棺の石材の系統から、禁野車塚の被葬者と何らかの関係があるともいわれます。

禁野車塚の首長系譜と関連か

想像ですが、天野川下流の水系を支配した禁野車塚の首長系譜にある首長が、ヤマト政権の承認を得て淀川にまで進出し、支配を広めた結果、氏族のシンボルとして、淀川を見下ろす丘上に前方後円墳を築いたとも考えられます。破壊のためまったく墳形を留めていないのは残念です。なお、簡単な埋葬施設のみの高

槻安満宮山古墳に似た古墳であった可能性もあるとする説があります。発見された三角縁神獸鏡などは東京大学理学部人類学教室に保管されているということ。と判明しました。



万年寺山古墳出土
三角縁六神四獣鏡

牧野車塚古墳

穂谷川水系の古墳

牧野車塚（古墳／車塚1丁目）は周溝、外堤を備えた府下でも屈指の美しい前方後円墳で、国の史跡です。墳丘長は107.5m、北に穂谷川



牧野車塚古墳入口

禁野車塚、万年寺山の首長系譜が、支配地をヤマト政権の承認を得ながら穂谷川水系と淀川流域の一部にも広げ、その結果、一族の古墳を4世

を見て、東に前方部、西に後円部を配しています。最近の調査では、鰭付円筒埴輪が見つかり、4世紀中葉かそれ以前とされ、古墳時代前期中葉と判明しました。

紀中葉に場所を移して造営したといわれています。

ヤマト政権 直轄氏族の墓か

穂谷川周辺に分散していた集落をまとめて支配し、1世紀以上をかけて古墳造営にまで育て上げた力量、また典型的な前方後円墳の見事な墳形他地域、多種、遠方の石材などを搬入しているなどから、ヤマト政権成立後、派遣された有能な有力氏族出身の被葬者を想定し、その後継者がこの地域を支配するシンボルとしたとも想像できます。

当時、古墳に墓誌を入れる風習はなかったようで、文字がなかったのか、神である被葬者の名前に執着を持たなかったのか、発掘が行われたとしても被葬者名を確定することは難しいようです。周辺

には同じ首長系譜とみられる後続の首長墓が存続し、牧野車塚をシンボルとしながら7世紀初頭までその支配を継続したのです。



牧野車塚古墳全景

【参考】

枚方市「郷土枚方の歴史」平成9年。瀬川芳則、西田敏秀他「枚方の歴史」2013年5月。都出比呂志「古代国家はいっつ成立したか」2011年8月(岩波新書)。広瀬和雄

「前方後円墳の世界」2010年8月(同)。吉村武彦「ヤマト政権」2010年11月(同)。白石太一郎「古墳とヤマト政権」平成11年4月(文春新書)。西田敏秀他「北河内の古墳」平成21年3月(財団法人交野市文化財事業団)

機関誌の文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありますが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会の実施、機関誌(本誌)を発行しています。

会費は3600円(1年度)です。入会をお待ちしています。ご希望の方は、電話(832)5722上野まで。